

湯川佳一郎先生のご逝去を悼む

ABIKO, Shin / 安孫子, 信

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

2

(発行年 / Year)

2009-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007950>

湯川佳一郎先生のご逝去を悼む

安孫子 信

本学名誉教授で、哲学科で昭和五八年（一九八三年）から平成十年（一九九七年）まで教鞭を取られた湯川佳一郎先生が、昨年の十月九日にお亡くなりになった。先生は昭和二年（一九二七年）八月のお生まれであるので、享年は八一歳ということになる。今の長寿社会の中で必ずしも「長命とは言えないのかも知れないが、もともと決してご壮健ではなかった先生のことを思えば、先生は見事に天寿を全うされたと思う。

事実、法政をご退職後、悠々自適の静かなご生活のはずが、難病であるパーキンソン病を発病され、先生は近年、それに伴う様々の障害と闘っておられた。運動上の症状で外出時に転ばれることなどもたびたびあったという。また言動が鈍くなるといった精神的症状も現れていると聞い

ていた。そんな中、一昨年の夏には長く暮らしておられた逗子のお宅を離れ、ご子息一家が住んでおられるのと同じ、大田区内のマンションにご夫妻で移られた。ご家族を挙げて先生をお世話する体制が整えられたのである。

そのようなご静養中の一日、昨年の二月に、私は文学部資料室におられた大井さん、また哲学研究室の長谷川さんと連れ立って、大田区の閑静な一角を占めるマンションに先生ご夫妻をお訪ねした。そこにはお見受けしたところで、は以前と変わらず、部屋着をではあるが、瀟洒に着こなした先生がおられた。しかし先生は、ソファの一隅に腰をかけたまま、相槌をときどき打たれる以外はほとんど口を利かれず、また居ずまいを直すのにもご自身の力では足りずに、奥様に介添えを求められた。体力が衰えてきていること、嚙下力も落ちてきていて食事の準備にも工夫がいること、それ以上に気力の衰えがあつてリハビリの訓練に向かわせるにも叱咤がいることなど、奥様はお世話の苦労を物語って下さった。横で「すべてわかっている」という表情で（実際にすべてわかっておられたわけだが）黙然と聴いておられた先生のお姿が忘れられない。われわれの帰り際に、先生は文字通り意を決し、手助けされながらも立ち上がって、玄関先までわれわれを見送りに出て下さった。私にはそれが生前の先生との最後のお別れになってしま

った。

その後、ご夫妻での静かな水入らずの生活があり、他方で、治療やリハビリを重ねながらも徐々に体力と気力との衰えがあったはずである。とくに嚥下力の低下が深刻さを増していった昨秋、十月九日朝に、奥様が台所に立たれたわずかの隙に、先生はお好きなバナナを喉に詰まらせて心肺停止の状態となられ、病院に搬送されたものの、手当ての甲斐なく瞑目されたのである。ご家族のお話では、医師からは、喉を切開しチューブをつなぎ完全に流動食で栄養を摂取すべき時期であると、先生ご自身にもすでに伝えられていたとのこと、しかしそれに対しては、先生は、「そうまでして」との拒否の意志を示されたということである。

先生はかつて、法政をご退職の際の、デカルトの「高邁」をめぐる最終講義で、デカルト道徳の核をなす「高邁」とは「自由意志の使用と意志作用の支配」のことであると強く語っておられた。先生のご最期は、チューブの拒否という、いかにも先生らしい「意志作用」の支配下のことであって、見事にカルテジアンとしてのものであったと言えるであろう。他方、先生は最終講義を、デカルト自身の末期の言葉「さあ、魂よ、行かねばならぬ」を引いて閉じておられた。さて果たして、先生がご自身のこととしてこの言

葉を発せられたのは（私は間違いなく発せられたと思う）いつ、どこでのことだったのか。四十九日の法要と納骨の儀も無事に終わって、先生は、今は、ご出身地新潟市内の西巖寺で安らかな眠りについておられる。その眠りもカルテジアンとしてのものではなく、私としては不躰ながらもこの問いを、いつか、先生の墓前でぜひ発してみたいと考えている。合掌。

*湯川佳一郎先生の最終講義（「高邁」について——高邁な哲学者デカルト——）は『哲学年誌』第29号一九九七年に収められています。